知的障害を伴うASD者に有効な就労支援に関する一考察
ーTTAPアセスメントに基づいてー

○康 一炜　（早稲田大学大学院 梅永研究室　修士２年）
梅永 雄二（早稲田大学 教育・総合科学学術院 教育心理学専修）

１　目的

自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder；以下「ASD」という。）は、DSM-5（American Psychiatry Association, 2013）によると、「社会的コミュニケーションおよび相互関係における持続的障害」および「限定された反復する様式の行動、興味、活動」２つの特徴で定義される発達障害の１つである。

近年ではASDの発症率が増加している。アメリカの統計（CDC, 2018）によると、全米の子どもの自閉症の発症率は、、2000年での調査では150人のうち１人だったのに比べ、2018年では44人のうち１人になった。18年間で発症率が３倍ほど増加した。

しかしながら、ASD者の就労支援は十分に対応されているといえない（Keel, etc., 1997）。彼らは仕事に対する意欲があるにもかかわらず、就職と仕事の維持に困難を示している。その原因には、ASD者の特性として、人とのかかわりでの難しさ、実行機能の弱さ、感覚敏感や二次障害などの課題が報告されている（Hendricks, 2010）。

適切な支援があれば、ASD者たちは優れた能力を発揮し職場での成功を収めることができる。自閉症の人に対する早期診断から成人期の就労、居住支援に至る包括的なサポートプログラムTEACCH Autism Program（以下「TEACCHプログラム」という。）は、就労支援におけるASD者の89%の職場定着率が報告された。TEACCHプログラムは、個人の長所や興味を生かすこと、適切な職業マッチング、学校在学中から就労移行支援、職場定着における長期サポートを提供することが重要だといわれている。日本でもTEACCHプログラムがもたらした「構造化」を用いて、職場に定着し、自立して活動ができた支援の事例が紹介されている（梅永, 2016）。

また、アセスメントに基づいて診断と評価をして、具体的な指導・支援の方法を提供することをとても重要視している（梅永, 2007）。TEACCHプログラムが行っているアセスメントの１つであるTEACCH Transition Assessment Profile（以下「TTAP」という。）は、学校から地域での成人生活への移行のためのアセスメントである。直接観察尺度をはじめ、家庭尺度、学校/職場尺度の３つの尺度で評価されている。そして６つの領域のうち、ハードスキルである「職業スキル」の１領域とソフトスキルである「職業行動」「自立機能」「余暇スキル」「機能的コミュニケーション」「対人行動」の５領域で構成されている。ソフトスキルは、日常生活能力や対人関係など仕事に間接的に影響を与えるスキルのことである（梅永, 2017）。また、採点基準は「合格」「芽生え反応」「不合格」の３基準となっている。

以上を踏まえて、本研究ではTTAPを使い、軽度知的障害を伴う自閉症児に対する早期介入を行い、アセスメントを行った結果を報告する。

２　方法

(1) 対象児

ASDと診断を受けている軽度知的障害児、ナナ（仮名）、16歳。

(2) 手続き

W大学のセッションルームで週１回に１度約50分程度の個人指導を受けた。セッションでは、TTAPを実施し、結果に基づいて職業教育を行っていた。

３　結果

(1) TTAPの結果（図１～３）

図１では、３つの尺度結果を示している。尺度間での大きな差はみられないが、家庭尺度にやや「合格」が少なく、「芽生え」が多いことがわかる。家では母親から見て「本人がまだできていないから、つい手助けしてしまう」ことが影響している可能性がある。一方で、学校やセッションルームにおける構造化された環境の中で、１人で簡単な作業であれば遂行することができる。

図２では、６つの領域の結果を示している。本児はASDと診断されたにもかかわらず、「機能的コミュニケーション」と「対人行動」が高い。

図３には、すべてのプロフィールを示した。全体的に、本児は「対人関係」と「機能的コミュニケーション」「職業行動」に「芽生え」が多いことから、個別の指導目標にすることによって、合格を増やすことができる。しかしながら、「職業スキル」、「自立機能」と「余暇スキル」について、今後より多くの作業の体験や生活体験によって、自分の得意分野や興味あることを見つけていくことによって、変化していく可能性がある。

(2) 構造化による支援方法の提案

絵や図による指示、ワークシステム、視覚的組織化とい

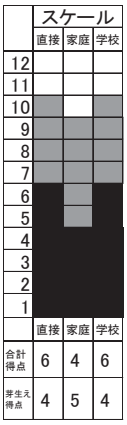

図１　３尺度

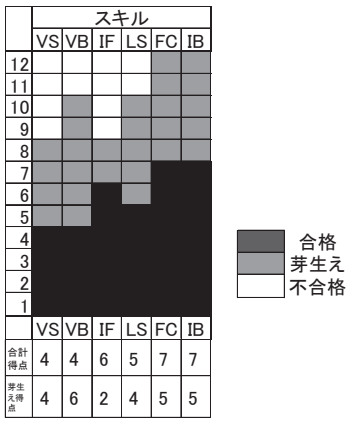

図２　６領域

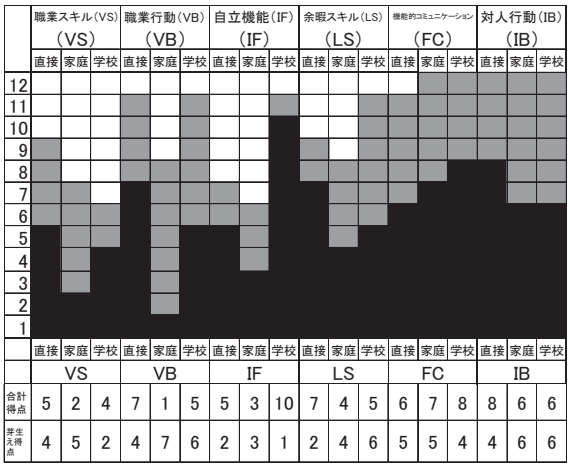

図３　全体プロフィール

った構造化を用いたことによって、自立して課題遂行することができると分かる。また、検査の初回にスケジュールボードを提示され、活動を確認するように１回指導されたあと、毎回自ら確認することができ、混乱を示さずに活動に移行することができた。そのため、スケジュールによって時間的構造化が有効だと考えられる。

４　考察

知的障害を伴うASD者は就労が難しいといわれており福祉施設に行くことが多い。しかしながら、TEACCHプログラムでは援助付き就労によって数多くのASD者が就職している。

本児もASDと診断されたが、学校在学中の段階でTTAPを実施することにより、多くの芽生えという領域を見出すことができた。米国のIEPでは、「芽生え」を個別指導目標にしている。よって、本児はアセスメントに基づいて、指導目標を明確にすることによって、芽生えから合格までに導くことができ、より具体的な就労への道筋が見出せるものだと考える。

また、結果の「対人行動」と「機能的コミュニケーション」領域では高く評価されているが、日常生活やセッションでもコミュニケーションでの困難さが見られたため、より細かいアセスメントが必要だと考えられる。そこで、障害者の職業適応力のアセスメントツールとして活用されているBWAP2（ベッカー職業プロフィール）を用いて、さらに評価を行った。結果の「対人関係」領域を抽出し、表１に示している。

表１　「対人関係」結果

	粗点	Tスコア	パーセンタイル値	ワークプレイスメント	ワークサポート
対人関係　IR	29	51	54	福祉就労　低レベル	C.ある程度被支援は必要

この結果から、「対人関係」領域のワークプレイスメント（現在の職業能力レベル）は福祉就労が低レベルとなり、ある程度の支援とスキルを身につけるための訓練が必要とわかる。総合的には、本児は要求を伝える、指示に従うなどの機能的コミュニケーション、他人と友好な関係を築くこともできているが、集団への社会参加や協力的な深い関係を築くスキルがこれからの指導目標に含むべきであろう。

５　今後の課題

日本の現状として、知的障害を伴う自閉症児者に対する職業教育や就労支援を行っているのは、特別支援学校、就労移行支援事業所、障害者職業センターなどがある。これらの機関にTTAPのような自閉症に特化したアセスメントを導入していくべきだと考えた。そのためには、学校の教員や施設の職員に、アセスメントに対する専門的な研修を行うべきであろう。

【参考文献】

1)　Centers for Disease Control and Prevention(2022) Data & Statistics on Autism Spectrum Disorder. (2022 年 8 月 1 日閲覧,　https://www.cdc.gov/ncbddd/autism/data.html)
2)　Dawn Hendricks (2010).　Employment and adults with autism spectrum disorders: Challenges and strategies for success. Journal of Vocational Rehabilitation 125–134
3)　Keel Jill Hinton, Mesibov Gary B., and Woods Amy V. (1997).　TEACCH-Supported Employment Program. Journal of Autism and Developmental Disorders. 27-1
4)　梅永 雄二(2007). 自閉症の人の自立をめざして――ノースカロライナにおける TEACCH プログラムに学ぶ. 北樹出版
5)　梅永 雄二(2016). 自閉症スペクトラムのための環境づくり――事例から学ぶ「構造化」ガイドブック. 株式会社学研プラス
6)　梅永 雄二(2017). 発達障害者の就労上の困難性と具体的対策 ―ASD 者を中心. 日本労働研究雑誌 59 (8)

【連絡先】

康 一炜
早稲田大学教育学研究科学校教育専攻梅永研究室
e-mail : evakang991226@toki.waseda.com